The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	戦中期の対外文化宣伝における「JPS PICTURE BOOKS」の役割 : GIRLS OF JAPAN』を中心に
Author(s)	橋詰, 知輝
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 44-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86305
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

戦中期の対外文化宣伝における「JPS PICTURE BOOKS」の役割
『GIRLS OF JAPAN』を中心に

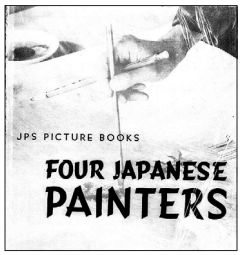
橋詰　知輝　京都工芸繊維大学大学院在学

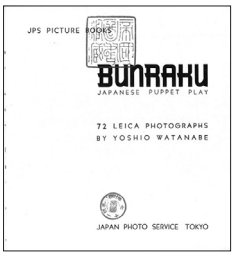
はじめに

1934 年，金銭面の折り合いなどから，写真家の木村伊兵衛らは名取洋之助の日本工房を離れ，中央工房を設立した。翌年の 1935 年，中央工房内の国際報道写真協会は Japan Photo Service（以下 JPS）に改組された。そうした中で 1939 年より発刊されたのが，「JPS PICTURE BOOKS」と呼ばれる 3 冊の写真集である。

本論文は, JPS PICTURE BOOKS の『Bunraku』,『FOUR JAPANESE PAINTERS』（以下 FJP）『GIRLS OF JAPAN』（以下 GOJ）の 3 冊を取り上げ，その概要を述べると共に，特に『GOJ』を 1939 年という時代背景と共に読み解き，当時の「若い女性」イメージと対外的な女性イメージの関連を示すものである。

『Bunraku』と『FOUR JAPANESE PAINTERS』



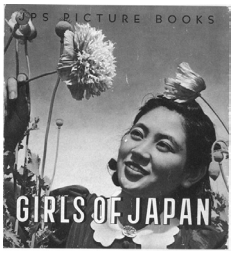


「JPS PICTURE BOOKS」は, 前述の JPS が 1939 年から 40 年にかけて発刊したシリーズ写真集である。全てが外国語での発刊であり,『Bunraku』,『FJP』は英語表記である。残る『GOJ』は英・仏・蘭語の 3 言語で併記されている。外務省文化事業部より様々な形で助成を受けた中で作成されたものであり,『FJP』と『Bunraku』は 3000 円の助成を受け，500 部が海外へ無料寄贈された。『GOJ』においては 8500 部もの冊数を海外配布し，6100 円もの助成を受けており，基本的には海外の読者に向けた写真集であることは間違いないだろう。

『FJP』と『Bunraku』においては，随所に写真が使用されるが，写真のタイトルとして文字が配されているようなページは見られず，論考や図版が大きなウェイトを占め，どちらも純粋な写真集として見せるような編集ではない。文章内では，文楽と日本画をつなぐ精神性があることが横山大観から語られる部分もあり，どちらにおいても，その東洋的な精神性が評価される内容であった。

また,『FJP』内の写真はここが初出で無いものも見受けられ,『Bunraku』内の寺田寅彦の論考は, 氏の死後に一部を都合よく既出の媒体より抜き出したものであることが判明したことから，編集者の跡は各所に見ることが出来る。

『GIRLS OF JAPAN』の撮影イメージの多様性



『GIRLS OF JAPAN』は 1939 年に出版された，日本人女性の写真を掲載する写真集である。前述の 2 冊は単独の写真家の撮影であったが，本書は日本工房と中央工房の複数の撮影者で構成され，撮影者や所属団体による表現の違いがみられる。また，大きなテーマ毎にページをわけて写真を掲載しているが，テーマや写真

家による区分だけでなく，個別の写真ごとにもいくつかのテーマが見られ，それらは長谷川如是閑の前書きに対応している。本書に出てくる女性は，それ自体が東洋的な精神性を持つとされた日本画と文楽と同じように，「女性という主語を拡大解釈し，それ自体が民族の精神性を代弁する」という構図に当てはまると思われる。女性がそうした性質を持つことを提示することによって，日本人女性が男性に対して劣っているわけではなく，重要な立場にあることを示す働きがあると思われる。

1939年の「若い女性」考

1939年は，日中戦争中であるといえども，国際的な立場を低下させないように対外的な文化宣伝に対して熱心に取り組まれていた年だった。そうした中，主として国内向けの婦人雑誌で取り上げられたのは，「母としての女性」であるとよく指摘される。また，一般大衆向けに発刊されている『アサヒグラフ』に見られるのは，婦人雑誌とは異なり，大衆向けのあまり飾らない女性たちの姿であり，国の検閲があったとしても，かなり等身大の女性像に近いといえるだろう。

それに対し，『GOJ』に見られるような「綺麗に身なりを整えた若い女性」にその対象を限定すると，国内向けのメディアでは，文芸雑誌『新女苑』が目標にしていたようなイメージと合致すると思われる。若い女性たちは『新女苑』を通じ，家庭の中でのあれこれといった「実用」ではなく，芸術や文芸なども含めた「教養」を学び，戦時社会においての自らの立ち位置を探していく。

また，対外的な日本人女性像として，衣服を整え，政府の思うような姿をした女性達は，対外宣伝グラフ誌等に非常によく見られる。『JAPAN IN PICTURES』の表紙や，国際観光局の出版した『JAPAN TODAY Women』においても，年齢層こそ広がるものの，若い女性達のイメージに於いて，その姿は非常に似通ったものとなっている。このように，国内において目指すべき姿とされた「若い女性」のイメージと，国外に対して向けられた「若い女性」のイメージは，それほど大きく乖離するわけではない。ゆえに，『GOJ』におけるイメージは，同時代の「あるべき若い日本人女性」を捉えたものだといえる。そこにある，理想的な女性たちの高度に洗練されたイメージは，洗練された精神性を持つとする日本画や文楽の世界に並び立ち，日本人女性をして，日本の高度な精神性，ひいては欧米に引けを取らない精神性を見せるものとなっている。

『GIRLS OF JAPAN』より

おわりに

本発表は，先行研究の存在しなかった「JPS PICTURE BOOKS」に焦点を当てた初の研究発表であると認識している。また，写真集内において，日本工房側との比較によって，中央工房側の写真的な特質が見えたのも興味深い。組織としての思想や方向性の違いだけにはとどまらない，写真の質の違いを確かに感じる写真集の存在は，2つの組織の違いをしっかりと確認できるものとして貴重である。更に，同時代の中での女性写真と，写真集内での女性写真を『GIRLS OF JAPAN』について比較することで，そこにたち現れるイメージが，日本が海外に向けて見せたいと思う，あるべき女性の姿であることも論じた。このような写真集のシリーズである「JPS PICTURE BOOKS」の目的は，文楽や日本画といった，文化としての単純な宣伝だけにとどまらず，欧米と比べても劣ることのない，日本人の高い精神性を紹介することが目的として挙げられていたのであろう。